

東北日本海側における一段活用類のラ行五段化傾向

彦坂佳宣

要旨：日本の周辺部には、一段・変格活用類が、優勢なラ行五段活用へ類推し、未然形「見ラ（ん）」、命令形「見レ」などとなることが知られている。これが、東日本でのラ行五段化は、新潟県以北の日本海側だけに分布する。この背景には、付随的な五段化誘因、また推量・意志「う」の分布がこの地域だけなどにある点に関与すると考えた。活用形では、否定形の五段化はなく、命令形「見レ」などの分布が意志形「見ロー」などのそれより広い。これは前者が後者に先行し、また活用形固有の理由があると見た。五段化の時期は、近世末期の庄内・新発田地方の方言資料ではすでに盛んで、近世中期頃にはこの動向が兆していた可能性があり、意志形は五段活用の末尾形ローが「一段活用語幹＋ロー」型を誘発したと考えた。

キーワード 一段・変格活用 ラ行五段化 東日本 地域差 誘因

1. はじめに

各地に一・二段また変格活用類のラ行五段化傾向（以下、五段化とも）がある。【見る】で言えば学
校文法の「ミ（ず／よう）・ミ（て）・ミル・ミレ（ば）・ミヨ」が、意志形「見ロー」、否定形「見ラ
（ん）」、命令形「見レ」、稀に連用形「見ッ（て）」などと変化し、ラ行五段活用化するものであり、活
用型の中で最も優勢なラ行五段活用への類推によることが知られている。早く、国語調査委員会
（1906）（以下、『口語法』）に報告があり、橋本進吉（1959）がラ行動詞への類推を指摘し、東北は小林
好日（1944）、近畿は岡田莊之輔・梅垣実（1962）などがある。これを『方言文法全国地図』（国立国
語研究所 以下、GAJ）により全国視野で考察したものに小林隆（1996、2004 - 以下「小林」）があり、
主要な活用形の分布様態の分析から、五段化は意志形ヨウの成った近世以降、分布特徴は「移行性
分布」と「逆方言圏論的分布」の両面、日本語活用体系の組み替えにも関与するものとした。彦
坂（2001、2002）は九州、また意志形の考察、松丸真大（2001）は高知での世代別の様子、小西いず
み（2011）は出雲の分布と五段化要因の検討などがある。

これらの研究で、ラ行五段活用への類推に加え、岡田他では「見はしない」など迂言的な（言い回
しの特徴とらえて仮にこう言う）否定表現、また彦坂・小西では終止形の語末ル音の変化の影響など、
個別の地域的要因も関与するとの指摘がある。

すると、主要因であるラ行五段化への類推に加え、改めて各地の個別的誘因、また五段化の発現
時期などを方言史的な点から検討する必要がある。また、小林のものは主としてGAJの分布分析に
よっており、過去の方言文献と比較対照した史的考察も望まれる。

本稿ではこの問題の全国視野での考察の前半部として、東日本で特にまとまって分布する東北地
方日本海側につき、GAJおよび近世後期以降の文献・研究類を参照し、五段化の詳しい分布差、そ

れに関与可能性のある各地個別の誘因、またその史的な問題について考察する。近年、大西拓一郎編(2016)『新日本言語地図』による新しい変化の研究も進められているが、本稿は今日の分布に潜む過去の経緯に焦点を当てた。

以下、見出し語は【】で示し、活用形の見出しは「起きよう」「起きろ」などとし、具体形は「起きヨウ」などカタカナで示す(仮名遣的表記を含む)。国語史については従来の成果に負う点が多く、「新古」の認定はこれによる。また、全国視野とする場合も、沖縄は著者の知見が乏しく、北海道は移住のもからんで難しく、当面の考察から省く。

なお、ラ行五段活用の「五段」は、東北地方では活用形の在否の関係で「五段活用」とは言えないが、誤解されることのない箇所は慣例として「五段活用」の名称を使用する。

2. GAJ による考察

2.1 ラ行五段化の分布と地域的特色

問題のラ行五段化は、東日本では意志形と命令形が主である。活用型も、二段型は既に一段化しているため、上・下一段型が問題となる。変格活用もほぼ同じ地域に五段化があるが、率は低調であり、加えて固有の性格も関わるため、地域と傾向がほぼ同じであることを確認して、今は対象としない。

まず、この五段化の全国を鳥瞰した図 1-1・2 により、東日本の模様を見ておく。これは、GAJ の本調査で取り上げられた語の範囲でまとめたものである。否定形の五段化は東日本にないため示さない。また使役形「～ラセル」(「起きラセル」など)は大きく分布が異なるため、別の原理が働くとして、今はとりあげない。

2つの活用形図の間で調査対象の語はやや異なるが、趨勢を見るには支障ないと思う。また、「書かせる」は使役の助動詞を加えた形式であるが、五段化は活用型や音節数により進み方の違う場合があり、辞的な要素の五段化を点検するのに有益である。「任せる」など五段と一(二)段が地域的にゆれるものは省いた。

なお、五段化には、意志形として九州に多い「見ロー>見ッド」など、愛知県や東山地域(美濃・信州など)の古典語「うず」出自の「見ラズ」(これで意志・推量)などの形式も加えた。また、GAJ には無いが出雲の意志形「見ラー」なども同類とする。藤原与一(2000)第5章「ラ行五段活用」では、命令形～ロも加えるなど広い範囲を対象にするが、今は GAJ の五段化の命令形は～レとし、早くからある～ロは除外する。

まず全国的な視野から、東日本の特徴を掴んでおく。両図によれば東北と九州にラ行五段化が優勢で、他の地域では局地的である。これは、小林も指摘する「逆方言集圏論」的な分布、すなわち周辺で新しい動向が起こっている結果である。中央語の規制が周辺地域で緩みがちなため、独自の変化を辿ることが多く、この場合は、周知のように五段活用の中で最も動詞数の多いラ行五段活用語に引かれた結果である。本稿は、これをやや降り立ってその地域的要因、また史的経過を辿るのである。

一方、周辺間で異なる点もある。九州は、地域差が大きく、また「書かせる」など助動詞語尾をもつ辞的な活用語までには五段化が及ばないのに対し、東北を含めた東日本は比較的五段化が盛ん

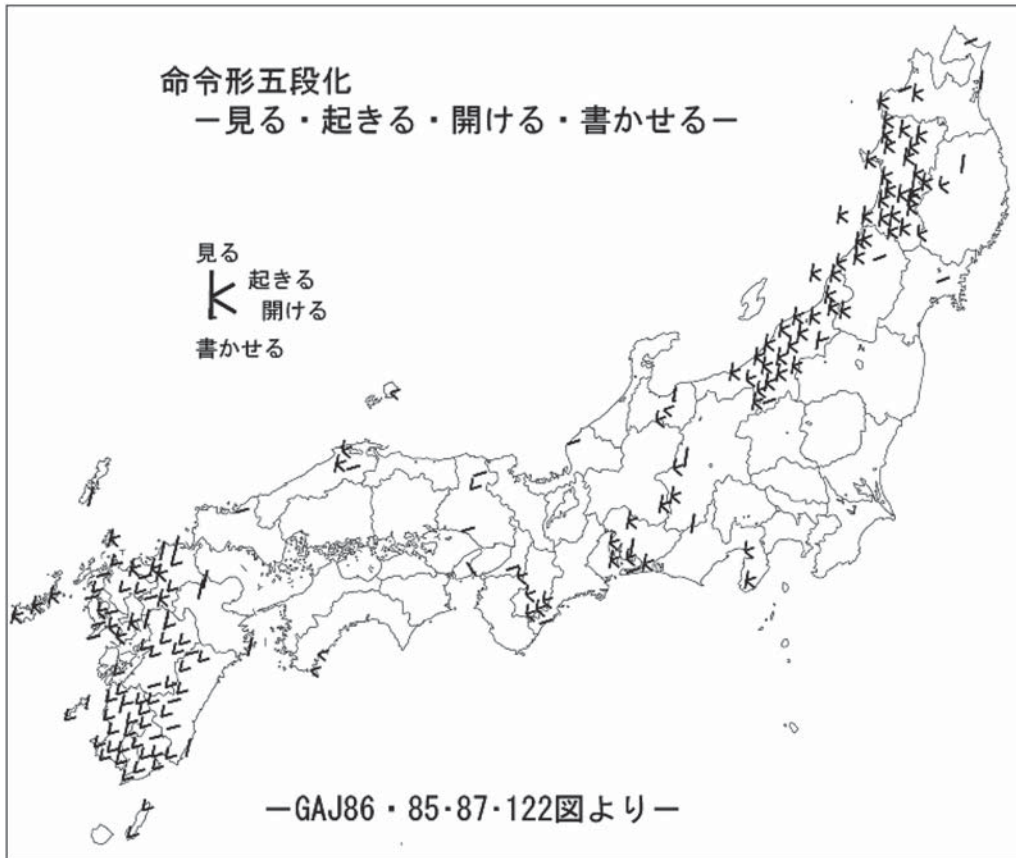


図 1.1 命令形のラ行五段化図

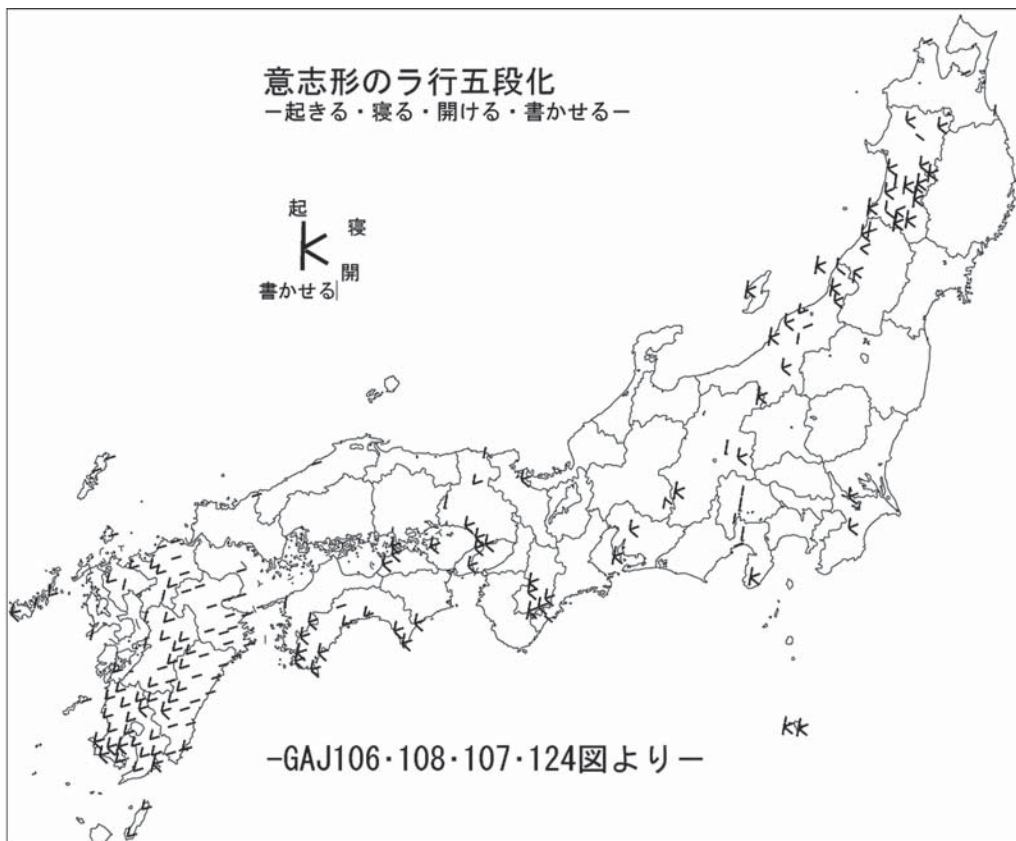


図 1.2 意志形のラ行五段化図

である。これは、各語の五段化を示す図1類のK印が東日本で欠損が少ない点に表れている。九州を含む西日本の考察は次に予定するが、東日本の五段化はかなり広い語に進行し、何か活発な条件があり、またかなり古くから進行しているのであろう。

東北地方内部でも注意すべき点がある。まず、命令形のラ行五段化の分布が広く、意志形は狭い。これは、意志形のラ行五段化が近畿から海沿いに伝播した助動詞「う」に起こり、他の東北に多い意志「べー」には不変化助動詞で起こらないのが大きな理由であろう。その「う」は近畿に近い新潟県では内陸部にもあるが、次第に沿岸部に限定され、秋田県の中中部地域までで止まっている。

これに対して、命令形は意志形五段化の区域を包んでさらに広い。語別の五段化を示すk印は意志形より命令形の方が完備している。これらは、命令形のラ行五段化が恐らく先行し、また一律的に進行する何らかの理由があるのであろう。

そしてまた、その五段化が図1類のような地域に限定される理由は何によるのであろうか。

2.2 ラ行五段化をさそう諸要因

繰り返しになるが、全国的なラ行五段化は一・二段、変格活用類がラ行五段活用語の勢力にとりこまれる傾向である。しかし、降り立って考えると、図1のような特定の分布を発現させた地域的誘因として他に考えられるものがある。この点を先に見ておく。

先行研究によれば、全国視野では、岡田・他で「見はしない」など迂言的否定形が「見リヤー・見ラー」などの異形態を生じ、ラ行五段化の誘因であるとしたり、動詞末のル脱が関与するなどの諸誘因が考えられている。東日本に迂言的否定形はまず無いが、古典語の（現在）推量「らむ」出自の推量～ロー形式（「行くロー」など）、「形容詞+う」による末尾形～カロー形式（「高カロー」など）、

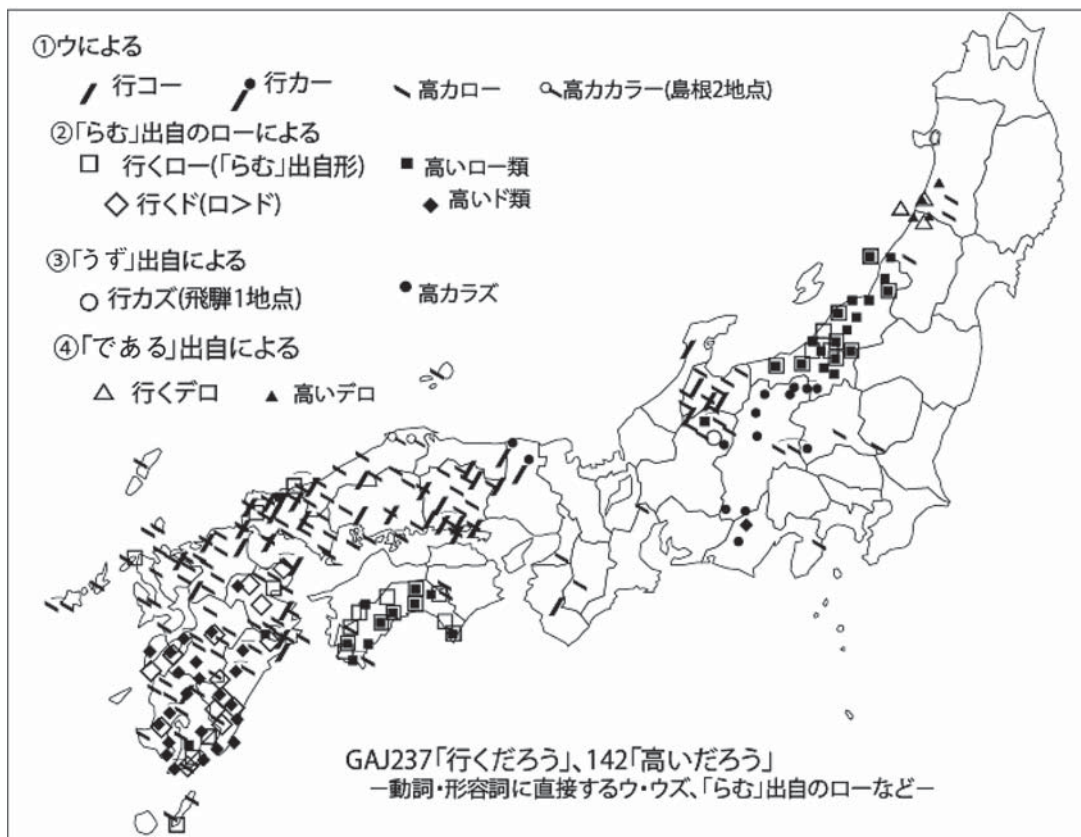


図2 全国視野でのラ行五段化誘因事象の分布

断定辞を含む推量形デロ（「であらう」出自、山形県庄内・秋田県由利地方）が命令・意志形の五段化に関与するように思う。これらは末尾の～ロー形式が、命令形～ロと抵触したり、意志形「～ロー」形とモダリティー表現で類を同じくするために類似形となるなど、変化の誘因になり得たものと思う。

これを全国視野で示し、ウに類するウズの場合も含めて図2とした。西日本の考察にも備え全国図で示す。

以下、地域別に五段化傾向を見ていく。なお、東山・北陸地方の五段化は西日本の影響が考えられ、続報に譲る。

3. 活用形ごとの五段化の分析

命令形、意志形に分けて、五段化の模様を考察する。

3.1 命令形の五段化

問題の五段化は、全体として勢力の大きなラ行五段活用にひかれた結果であるが、以下では特定の地域にある理由、五段化を進めた地域的な細部の理由を考える。

図2によれば、①助動詞「う」、②古典語「らむ」出自のロー、④「にてある」出自のデロが東北日本海側の新潟県から秋田県南部までである。これらに共通するロ・ロー形式は、東日本の古くかつ広くある命令形～ロ形と同音衝突を起こす。これを避けて、一段・変格活用型類の命令形～ロが、ラ行五段活用語への類推も手伝って五段化し、～レ命令形となったのではないか（小林論にも一部指摘あり）。これらは、図2によれば、新潟県を除き沿岸部に多いことも、図1の命令形の分布と似ている。ただ、「らむ」出自の～ロー、また～ロ命令形も古くからあり、同音衝突の点は時期に関して幾らか問題がある。命令形～ロは内陸部などにあり、古代はともかくとして、古くからあったことは確実であろう。同音衝突は、「う」による～ローは新しいが「らむ」のローは古く、命令形～レの成立はやや古いかも知れないが、難しいところである。

一方、図2の秋田県中部以北が空白であるのに対し、図1.1は青森県の一部にも及ぶ五段化～レ形がある。この点はどうか？

秋田県およびそれと接する青森県地域

秋田県については、内陸部の数地点が旧来の～ロ形であることを除き、～レ形が占有する形で五段化が強い。これには、この地域の（ア）ワ行五段活用のラ行活用化が誘因ではないか。秋田県教育委員会（2000）によれば、特に秋田県北部や鹿角地方、さらには隣接する青森県の一部に見られる。早くは、秋田県学務課（1929）の「他行よりラ行へ」項に、「ほる－ほう（追）」「あらる－あらふ（洗）」などの例があり、地域名の記載例はやはり鹿角郡に集中するが、無い語も多い。

ところが、大西拓一郎（1995）で指摘する『日本言語地図』の64図「おんぶする」を見ると、シヨル形が秋田県北部から青森県にかけてあり、（ア）は秋田県北部を中心にやや広い。これはラ行五段動詞化の動詞数を増すこととなり、結果として一段型の五段化命令形～レ形の誘因となり得よう。

また、（イ）秋田県学務課（1929）の「将然形」に五段活用「書かあ」などが載り、いま問題の一段活用型また変格活用を含め「起ぎらあ、受けらあ、来（く）らあ、為（す）らあ」などとある。これは北条忠雄（1982）で「秋田県では意志形の助動詞形式はなく、動詞終止形、またはその後ハを

加え…（ハ付加形は）短縮形着ラァ・立デラァとなる」（要旨、なお推量はベーあり）とするものである。これはラ行五段動詞ときわめて近い活用形となる。

これを図 1.2 「意志形」の GAJ 原図およびデータで点検すると、「終止形+ハ」由来形は、「青森県－東津軽郡 2・八戸、秋田県－南秋田郡 3、秋田市 2・仙北郡 3・川辺郡・由利郡」（数字は地点数、1 地点は無表記）であり、秋田県北部を除きほぼ広くある（後述、図 3 の GAJ 「起きよう」の「終止形+ハ」形は個別動詞の分布でやや狭い）。

（ア）は秋田県から青森県にかけて、（イ）は秋田県北部を除く地域にあり、範囲は異なるが、こうしたラ行五段活用型、または五段型活用形の優勢な模様が、結果として一段活用型の命令形を「五段化命令形～レ」へと導き、秋田県全般から青森県の一部にその分布域を生じさせた背景的誘因ではないか。同じ～レ形は青森県にもあるが、これは（ア）の傾向のある地域に、山形・秋田県方面から海沿いに伝播した余波的なものであろう。

秋田県南部から山形県沿岸部

秋田県西南の沿岸部にある由利郡付近は山形県庄内地方と共通性がある。図 2 によれば、これらの地域には推量デロがあり、～ロ命令形と衝突し、五段化～レが発生したと思う。山形県地域は～ロ命令形が圧倒的であり、五段化～レ形式は沿岸部に限られる。推量デロも沿岸部に限られ、モダリティ表現として同類、また語形も似て、五段化の誘因であった可能性を推測させる。

新潟県

新潟県では、内陸部にも五段化形～レが広くあって盛んであるが、僅かに～ロ命令形との併用もあり、これが上越地方の西端、頸城郡一带になると旧来の～ロ命令形しかない。この分布の背景は何であろうか。

頸城地方は西部方言に距離・性格とも近いが、GAJ での命令形は東部方言の～ロである。それなのに五段化がここに無いのは、1 つには図 2 のような「らむ」のローがないからであろう。

以上、命令形につき、ほぼ県単位でそれぞれの五段化誘因の可能性について指摘した。この要因を、辻褃合わせの御都合主義と見る立場もあろうが、筆者としては五段化の類推因子と思われるラ行五段活用動詞またはその一部の活用形の増加、また推量表現形式との同音衝突の回避の点を重視した。これらの事項は、図 2 によれば他の東北地方には見られず、分布も重なり、命令形～レの分布域を規定する要因として無視できないように思う。

3.2 条件表現形式との関連

さらに、条件表現形式も関係すると思う。図 3 は彦坂（2007）の仮定条件形式類の分布概要である。東西の端にバ形式のある圏論的分布であるが、東日本では～バ形式が新潟県糸魚川付近～房総半島先端部を結ぶ線から東部に、表現〔1〕〔3〕〔5〕〔2〕〔6〕と、次第に範囲を狭めながら分布する。これら～バ形式を一段活用に当てはめると、「見れば」「起きれば」「開ければ」など～レバ形式となる。これが新潟県頸城郡など西側は「見リヤー」「起キリヤー」、あるいは「見（み）タラ」…「開ケタラ」…であり、東側と大きな違いがある。地理的に見るとラ行五段動詞仮定形相当が東北地方で重い価値をもつ地域となり、意味があろう。～レバ形式は東北地方に広くあるが、これと上記の各県のラ行五段化をさそう因子とを組み合わせると、まさに図 1.1 のようなラ行五段化命令形の分布が現れ、他の東北地方と区別されることになる。

柳田征司（2010）は、命令形～ロの発現経緯を探るのに、五段化命令形～レが～ロと隣接する点か

ら～ロを基に～レが発現したとするが、～レを主体に図 1.1 の分布を発現させる要因を探る方向なら、上のような要因の重なりが重要であろう。

3.3 意志形の五段化

意志形の場合、図 1.2 によれば、命令形五段化よりも分布が狭く、語により五段化の進捗が違ふ。五段化形は秋田県中部以南に厚く、山形・新潟県では海岸寄りに片寄り、相対的にまばらであり、五段化命令形～レの範囲よりも狭く、新潟県では中越以北に片寄るとも言えるくらいであり、「開ける」「書かせる」などの五段化は弱くなる。

これは、意志形が命令形に遅れて五段化していることと、五段化しやすい語が先行し、新潟県などでは五段化が未発の地域・語もあることになる。それに対して、秋田県南半地域ではほぼ全ての語が五段化を起こして活発な地域で、この動向の主要地域とも言えるくらいである。秋田県は、上記の北条などによれば、意志形が少ないところなのに、どういふことか。以下、県別に見る。

秋田県

図 1.2 によれば、五段化意志形は県南部に厚く、それが東部の内陸にもあり、次第に北上するような分布である。その発現は、山形県沿岸の庄内地方に繋がる秋田県由利地方と思われ、ここから意志形五段化～ローが進出していると思う。そして、秋田県学務課 (1929) にこの五段化の記載がないのは、やはり命令形が先行し、意志形が遅れていたために違ひない。それが、図 1.2 によれば、GAJ の時代には調査語のほぼ全てが五段化を起こすまでになっている。

これを秋田県教育委員会 (2000) の 75 図「意向 (独り言で) - 連休は登山に行こう」(一段活用例がないので五段活用で代用、以下、原図とする) の上に GAJ 「起きよう」のうち (ア) 終止形基本によるオキラ (「起きるハ」出自) 類、また (イ) 五段化形オキローを重ねると、図 4 のようになる。原図の判例形は「～類」としてまと

め、図左の下半部に置いた。僅かにある「てみる」表現による「えつてみろかな」(五段化意志形「見ろう」) は略したが、やはり GAJ の五段化形オキローの近くにある。

原図の解釈は次によるだろう。古いものは先の北条指摘の裸終止形エグで南北にわたり広く、一部意志のベーのある地域を除いて基調である。エガは「行く+ハ」由来で男鹿半島付け根付近に多く、単純動詞エグに隣接しており、同じ出自であることを示す。意志

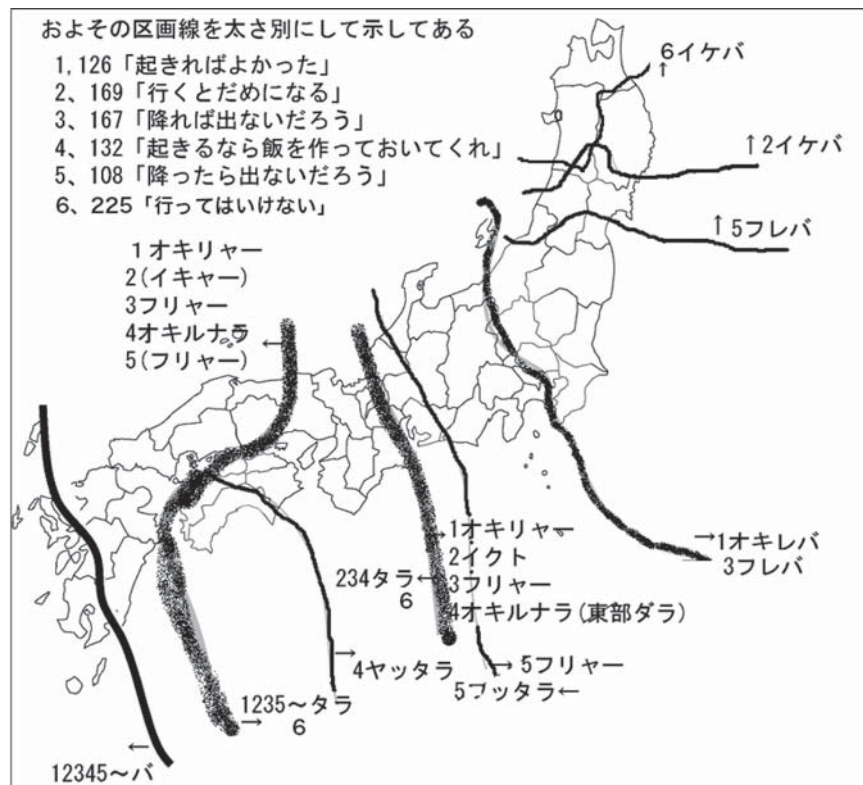


図 3 東北のバ条件法の範囲

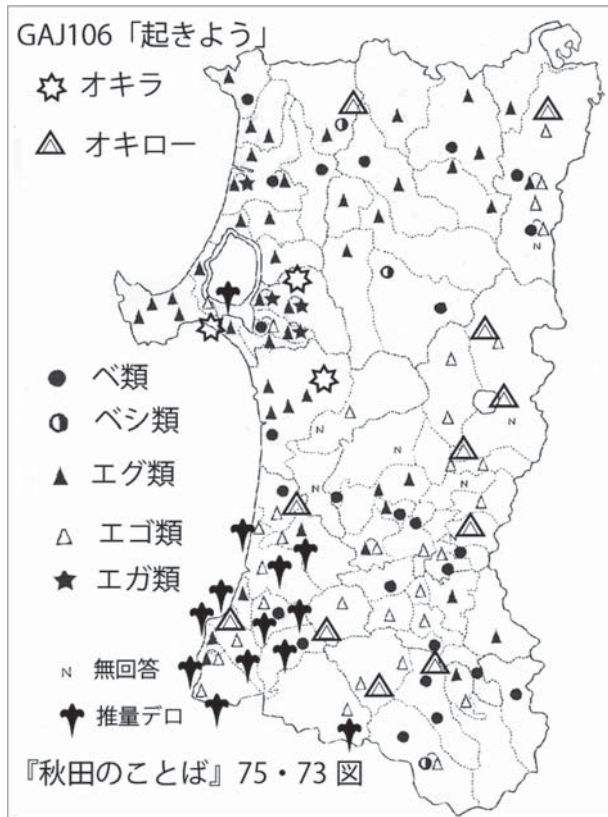


図4 『秋田のことば』とGAJ106の合成図

外の庄内地方にもあるのが図2の南西部の由利郡に連続している。恐らく意志五段化オキローも、同じモダリティ表現として（かつて「う」単独で意志・推量ともに表した例がある点をふまえて）、これと連動して庄内ないし秋田県南西部付近で発現し、原図のエゴなど助動詞ウの範囲で拡大し、先の鉄道・街道沿いに北上しているのではないか。

原図データの調査はGAJより遅れ、助動詞ウなど新形式の分布は控え目に見る必要はあるが、重なり of 基調は大きくは変わらないと思う。以上によれば、推量デロ・「う」の進出という要因が考えられる。

山形県

ここは、沿岸部だけに五段化が起こっている。図2には同じ地域に推量デロがあり、秋田県南部と同じ連動があるものと思う。そして秋田県と違い、語により五段化の出入りがあり、五段化がやや緩慢のようである。限定的な分布と語の制限は、この五段化がやや新しい現象であることを示唆しよう。

新潟県

新潟県でも、山形県と似て、語により五段化形の分布に広狭があり、辞的表現の「書かせよう」が最も狭く、次いで「開けよう」の順になる。使用頻度の違いもあるが、「書かせよう」の場合は辞的なものであることが要因と思う（九州でも活用型、動詞か助動詞かによる五段化にかなりの差がある - 彦坂2001）。そして、分布は沿岸ないし北部寄り、西部では五段化形よりも、「う」から「よう」を分化したヨウが多い（「見ヨウ・起きヨウ」など。ヨウ形は図1.2には対象外で表示なし）。なお、この地域の五段化は、「らむ」出自のロー形式と用法上の近さから、これに同調して五段化～ローが出現したことも考えられよう。すでに意志形五段化可能性のある地域では、命令形～ロは～レに変わって

のベー・ベシはかなりの地域にある。最新形は助動詞「う」によるエゴで、これは中部また東北部に既にかなり広がっており、秋田県南部から沿岸を北上、また湯沢－横手－仙北－鹿角といった奥羽本線または街道ぞいに展開していると解釈できる。－以上の点は、先の北条著では、エガはもう少し広く、ベーは県北に多く、「う」によるエゴはエガと同じ地域にあるように感じる。両者の間に多少の変化があったようである。

これにGAJ「起きよう」図の形式（図左上凡例）を加えると、「う」によるエゴの地域とGAJの五段化形オキローはよく重なり、同じ「う」出自類に、一段型は五段化が生じていることが分かる。

さらに同著の「推量」73図「どうして毎日こんなに雪がふるんだらう」のうち、デロ・ガロを「推量デロ」とまとめ、ツバメ印で転記した（推量ベーはデロ地域を除くほぼ全域）。原図記号との重複を避け少し地点をずらしたが、デロは図

おり、この空き間に入ることができる。

3.4 まとめ

以上、ラ行五段化につき、分布は命令形が広くて意志形が狭く、前者が先行したと考えられること、意志形は「う」のある東北沿岸地域にのみ起こり、北部がどの語も五段化するが南部ではしない語もあって、語の性格の差が関与するであろうこと、そして県別に五段化の誘因をさぐり、これと条件法における～レバ形領域との重なりもラ行五段化の分布域を規定しているとした。

次には、このような状態の背景にある史的な面はどうか問題となろう。

4. 史的考察

以下では、上に見たGAJの様子の史的背景を、手係りのある範囲で考える。

4.1 『口語法調査報告書』(1906) (以下、『口語法』) から

これは、明治後半期の模様を知る手がかりとなる。表1が『口語法』の青森県～新潟県まで関連する活用型を私にまとめたものである。地域別また「命令」と「未来」の別に配した。山形・新潟県は海岸部のみ表示、他の内陸地域は山形県では五段化が発現せず、「命令」は伝統的な～口、また「未来」はペー、新潟県は同じく～口とヨウ分化形が多い。新潟県頸城郡地方は、命令・意志形とも五段化していない。

以下、表からその特徴を簡条書きにする。

(1) 注意を要する点と信頼に足る点

(ア) 青森・秋田県の「未来」ヨウは今までの考察からして怪しい。質問の選択肢の範囲(「見よう」「見う」など、「二様ノ何レかに云フカ」という質問)で近いものを選んだと思われ、方言を反映しないと思う。他県の場合も幾らかあるか。

(イ) 信頼に足る点…他の地域の「未来」はヨウ回答が多く、GAJと比較して、ひとまず妥当であろう。ただ後述のように日常でのヨウ使用度はやや低いように思う。「命令」は、その選択肢が～ヨ・イ・口の三種のみで、そこに五段化～レが回答された場合は実情の反映であろう。

(2) 判明点

(ウ) 五段化は、全体に「命令」が進み、「未来」は遅れる。

(エ) 山形・新潟県の沿岸地域を主とする「未来・命令」ともに、旧来の活用形も混じり、全体に五段化はまだその途上の段階である。

(オ) 活用型別の五段化の遅速に関しては、「未来・命令」ともに五段化率に顕著な差なし。幾らか「未来」の上・下型活用の方に差があるかという程度である。

(カ) 表には加えなかったが、新潟県上越地域の頸城郡はやはり「未来・命令」とも五段化無し。

まず(1)は、所与の選択肢に誘導される面が強い。その上で、(ウ)は今までの考察と同じ序列で整合する。(エ)はウが海路により伝播・定着し、かつ五段化の途上と見る。(オ)は九州などで二段型の五段化が遅いが、この地域は早く一段化が完了しており、差が出ないのであろう。GAJの様相では意志形の五段化は語によりばらつきが見られたが、『口語法』はこの差が顕著でない。『口語法』

表 1. 『口語法』の命令形と未来形の五段程度

命令形	「上一段型」	「上二段型」	「下二段型」
『口語法』- 県- 内部地域	5条上一段命令「着・射…」	3条上二命令「起・落・強…」	4条下二命令「得・任…」
青森 県 下 石沢郡	× △/口	× ×/口	× 口 × 口
秋田	○/口混	○/口混	○/口混
山形-海 沿郡	○	○	○
新潟-主 に海沿い	○/口混	○海沿い郡/口混- 内陸郡	○/口混
未来形			
	5条上一未来「着・射…」	3条上二未来「起・落・強…」	4条下二未来「得・任…」
青森 県 下 石沢郡	×/ヨ- △/ユ-・ヨ-	×/ヨ-	× ×/ヨ-
秋田	×/ヨ-	×ヨ-	×ヨ-
山形-海 沿郡	○	○	○
新潟-主 に海沿い	○/ヨ-混在	△2郡のみ 他地域 ヨ-多し	△/ヨ-多し
凡例:○五段化あり、△五段化一部あり、× 空白-五段化未発現。「 」県内地域区分、「/」直前地域補足(主に別形式の存否)。命令「口」は伝統的~口形、未来「ヨ-」はヨウ分化形、ユ-はウ段拗長音形。「混」は混在。			
例: 青森県の5条上一段命令に「× △/~口」とあるのは、「青森県は×で未発現、 →県内の石沢郡は△→やや発現し、/→別に口形もある」。同じく未来は青森県で×で未発、/ヨ-あり、 石沢郡では△やや発現、「着ユ-」・ヨウもあり。			

の報告がやや大雑把なためではないか。(カ)は図1の分布とその考察とが一致する。私見では、やはり頸城郡で分かれる条件法の~レバ形式の分布域とも関与するように思う。

4.2 近世後期の2地域の資料から

4.2.1 山形県庄内地方の郷土本

庄内地方には、近世後期の郷土本、「温泉の垢」(寛政10-1798)、「箴の千言」(文化9跋-1812)、「苦界船乗合咄」(慶応3序-1867)などがある。齊藤義七郎(1965)、石川明子(1978)にも、ここに問題の五段化があるとの指摘はあるが、地域的誘因についての考察はない。改めて点検する。原文の傍記は〔〕、筆者による補足は()に入れた。

○意志・推量例

- (1) (捕獲した鷺を) たんほ〔田畝也〕さ連れていてひき〔藁〕とらせろて。温泉の垢 160 頁
- (2) おれどふして出られろばし(推量・反語) 温泉の垢 176 頁
- (3) 取てくれろば取て貰つかの 箴の千言 121 頁

○命令形

- (4) そして曾平殿さ行って見れちや 苦界船乗合咄 380 頁
- (5) おれも一盃吞せレチヤと… 箴の千言 121 頁

上の例は(1)(5)の使役、(2)の可能など辞的形式レベルまで五段化し、意志(推量)・命令形ともに五段化の進捗は明治末期の『口語法』と比べてやや進んでいる様子がある。

また意志・推量形は、(3)「取てくれろば」など～ローバ型での推量・疑問・反語表現が多い（ここで言う～ローバ形は、国語史での～ウバ形式にあたり、伝播を受けて方言化したのであろう）。五段型の場合「何てことあろばや」（箴の千言）、推量デロの「有んでろの」（苦界船乗合咄）など～ローバ、～ロー末尾形となり、この頻度が多く、問題とする一段活用類にも及んで、推量・意志の五段化形が出来ていると思う。既に、意志形はウ、推量はデアロ・デロ形という表現分化はあるが、意志・推量とともに表す～ローバ型も伝統表現として使用されている。また、「う」による形容詞推量「よかろぞし」（温泉の垢）などもあり、この～ロー形式が一段型のラ行五段化する誘因となりうる。ただ「らむ」出自のローはまず見られず、資料性の偏りなのか、無かったのか、判断が難しい。

この資料については船木礼子（2005）にも詳しい。本稿との関連では、推量のデアロ・デロが進出途上、問題の動詞類の意志形～ローに関しては、四段・カ変・サ変は「未然形+ウ」型に対し、一段動詞の場合は「語幹+ロウ」型とし、ヨウは医師の例（「早くこよふと（来ようと）」温泉の垢、175頁）と医者への発言だけに現れ、この地域の方言ではない）のみで方言外とする。また本稿では他地域に合わせて五段化とまとめているが、「一段動詞は四段動詞やサ変動詞なみに体系的に五段化がすすんでいる訳ではない」「…ロウはラ行五段化した一段動詞未然形（見ラ）に意志・推量表現形式のウが接続したことによって生じたものではない」とする（61頁～）。本稿の見方では、「元来のラ行五段型+う」の結果としての～ロー末尾形が、直接的に一段型にも及んで「一段型語幹+ロー」型となったことを言っている。

以上、資料で見る五段化全般は進んでおり、意志・推量、命令形は五段化形ばかりであり、かつ資料の状態からして方言をよく反映したものと思う。その誘因として、また別に、五段・一段を問わずにある～ローバ型の関与可能性も判明した。この形式は秋田県の一部にもある。こうして五段化は近世末期に既に多く、方言レベルで兆すのは中期の可能性もある。

4.2.2 新発田藩儒講義録

これには、金田弘（1983）、佐藤武義（1994）に問題の五段化の指摘もあり、彦坂（2002）も触れたが、五段化誘因に関する点の考察は少ない。改めて考える。

新発田生まれの藩儒、渡邊豫齋（文化3～安政6-1806～1859）と井東弦齋（文化11～明治22-1814～1889）の講義録から、上の諸氏も考察している渡邊の（ア）『豫齋先生語録』・（イ）『訓門人割記』、井東の（ウ）『井東先生学談』を取り上げる。このうち、複数巻をもつものは抄出とし、（ア）は全7巻のうち1・5巻、（イ）は乾坤のうち坤、そして（ウ）は1冊全体の調査をした。以下の説明でも明らかと思うが、複数巻の資料も全体を通覧したところ、抄出調査で傾向は明確になるとの判断である。

これらの資料は、先行研究の指摘のとおり、「イ／エ／ヘ」などの混同が著しく、カ・タ行音の有声化も多岐にわたり、方言の反映が随所に見られる。その上でやや公的な講義調の面もある。

以下、その五段化例を示す。

○命令形

・～レ（五段化例）-

- (1) ヨク形而下ヲ気ヲツケレト云ハレタ 豫齋一 29 ウ
- (2) 先ツ／＼書ヲミレト云処モアルガ…訓門 95 ウ
- (3) 取違ヘヌ様ニスレト云ハレタ。井東 68 オ

・～ロ形式（伝統方言形）

- (4) ～スルモノタカラ気ヲ着ケロト云ノ。訓門 31 オ
 ・～ヨ形式（仮に古典語的とする）
 (5) 尚考デミラレヨト井東丈ニ云ヘリ。豫齋一 57
 (6) コレーツテナニモカモセヨト云ハレタデナヘ。訓門 56 オ
 (7) 下ヘツケテミヨ（割注）訓門・坤 96 ウ

どの資料も五段化例が圧倒的であり、第2項の「～ロ形式」は極めて稀、第3項の「～ヨ」は敬意表現との共起、割り注などにあり、丁寧ないし古典的な用法であろう。サ変も五段化～レがあり、カ変は「来イ」（豫齋一 20 オなど）が主。命令形は、上記・佐藤によれば～レが多く、～ロ・～ヨもあるとし、～レから次第に～ロへと転換する過程を示すとするが、私見では～ロが従来形で、五段化～レに浸食される様子を語るものと思う。

次に意志形は、この資料では推量形も同形式なので、両方を取り上げる。

○意志・推量形

これは用例が多く、表2にまとめた。末尾形式を〔1〕～〔4〕に分け、〔4〕を除き動詞終止形相当による音節数別に配した。〔4〕は「～られる」由来相当例で、受身・尊敬用法を区別せず一括した。またヨウの可能性のある形式は網掛けとした。

この表のうち、〔1〕の「ロー」形式は短・長音節語にわたって多く、この新発田の資料でも、船木の指摘のように「一段活用語幹+ロウ」型である。一方、〔2〕の～ヨウ形式は短音節語に集中し、語幹保持を要する語類に片寄り、標準語ないし江戸語的な用法に近い。わずかながら〔3〕はそのヨウ以前の「着ユー・シ（為）ヨー」などの場合もあったことを思わせ、方言の反映かどうかは確かめにくい。ヨウ分化に至らない形式である。また〔4〕は～ラレル形式（由来）と考え、しかし表示の形式に至るには飛躍があり、船木の「語幹+ロー」型が庄内・新発田付近では既に熟合した形で定着していることを示す。これらは豫齋・井東に共通した模様である。

例は以下のようなものである。使役形も加えた。幾つか例示する。

○「(ら)れる」後接形の～ロー形

- ・ドツカニツカマイロウ…ト云ト却テ…豫齋一 54 オ
- ・マダ万平ワルイ事ヲ云ト云ハロフガ…豫齋一 14 ウ（「万平」は豫齋の名）
- ・親カ首ヲ打タロフトモ…井東 47 ウ

○ヨウの可能性例-

- ・一盃催シヨフト云ダ。豫齋一 5 ウ
- ・出ヤフ／＼ト思フテイテハ…訓門 7 オ／・コレヲ上ヨフト云ハレタト…井東 9 ウ

○ウ・オ段拗長音の可能性例

- ・思ヘキツテ帰リテ書ヲ看フトテ帰リテアツタ。豫齋一 3 ウ
- ・道ヲ明ニセウト云テハ…豫齋五 83 ウ

上の五段化推量形「首ヲ打タロフ」は受身の意味で「打た+れ+う」が「打たロー」となったものであるが、「打たりヨー」を経たのではなく、ロー形式が慣用となり「打た+ロー」といった直接的な成立となっていると思う。あとは、ヨウの例、「う」による拗長音形のものなどを示した。

なお、先述の秋田のワ行のラ行化と同じく「道ヲ荷ル人足ダ」（豫齋一 25 ウ）の例が孤例ながらある。

以上の近世後期・末期の庄内・新発田の資料群の模様からは、この地域の命令形、意志形・推量

表 2. 新発田藩儒 2 氏の講義録から

	[1]	[2]	[3]	[4]	
	～ラフ・ロフ・ロウ	～ヤフ・ヤフ・ヨフ・ヤウ	～ウ・フ	～られよう(受身・尊敬)	
2音節	見ラフ/ロウ/ノフ 11	為(シ)ヤウ/ヤフ/ヨフ 45	セ(為)ウ/フ 2		
	出ラフ 4	見ヤウ/ヤフ/ヨフ 14	着フ 1	<～ラフ・ロフ>	
	得ラフ/ロフ 3	出ヤウ/ヤフ 4	看フ 1	云ハラフ/ロウ 6	
	寝ロフ 1	来(コ)ヤフ/ヨフ/ヤウ 2	来(コ)フ 1	行カラフ 4	
	来ラフ 1	得ヤウ/ヨフ 1		書カラフ 1	
	居フ 1			打タロフ 1	
3音節	行ケラフ 3	上ゲヤウ・ヤフ・ヨフ 8	サシヤウ/セウ 2	吸ハラウ 1	
	溜メラウ 3	出来ヤウ・ヤフ 5	見セウ 1	思ハラフ 1	
	上ゲラフ 3	止メヤフ 2		嘗メラロウ 1	
	出来ロフ/ロウ 2	欠ケヨフ 1		考ヘラロフ 1	
	終ヘロウ 2			押ッ潰サラフ 1	
	入シラフ 1				
	吞メロフ 1			<～レロフ>形	
	グ(愚)レロフ 1			オ(居)ラレロフ 2	
	付ケロフ 1			云ハレロフ 1	
	生キロフ 1			食ハレロフ 1	
4音節	勤メラフ 1	押サヘヤウ 2		押サヘラレロフ 1	
	コサヘラフ 1	催シヨフ 1		放伐サレロフ 1	
		続ケヤウ 1			
	勤マロフ 1			<～レウ>	
	吞マセロフ 1			嘗メラレウ 1	
	求メラフ 1				
	答エラフ 1			<～ヤウ>	
	育テロウ 1			行ナハレヤウ 1	
5音節	切上ゲラフ 2	考ヘヤウ 1			
	掴マイロウ 1	押ッツケヤフ 1		<～ヤウ・ヤフ>	
	取立テロフ 1			得ラレヤフ 1	
	考エラフ 1			嘗メラレヤウ 1	
6音節以上	申上ゲロウ 1				
	伸ビラセロフ 1				
	吞込マセロフ 1				
	考エヲセラフ 1				
除外	(語形認定困難)	上ラフ、入ラフ 各1			

形の五段化は、近世後期に発現しており、それが兆したのは近世中期頃とも想定されよう。

4.2.3 五段化意志(推量)形～ローの出自について

先引の小林では意志形五段化～ローはヨウから変化したとする。これは全国視野での論ながら、東北地方でも GAJ で新潟県にヨウとローが混在ないし併存する点からの推測と思う。『口語法』も似ている。しかし、どうであろうか。

まず、標準的な、ヨウと五段化形～ローの発現図と考えられる GAJ106 図「起きよう」を例にとると、図は示さないがヨウは新潟県までで、山形県以北には現れない。対して～ローは新潟県でもヨウの範囲内にやや狭く、そして山形県海沿いから秋田県南半部に散見される。ここに、県域を越えた五段化形ローのある点が注意される。この山形・秋田県の五段化～ロー形は、ヨウからの変化を経たものとは思えない。

結論的には、主要因は、ヨウからのロー形化ではなく、上述「ラ行五段動詞+う」型の末尾～ロー形にならない、「一段型語幹+ロー」型が直接的に生じた結果と考える(要するに、ラ行五段型への直接的類推による五段化)。これが、GAJ でヨウのある新潟県を含めた、ラ行五段化の経緯と思う。

つまり、

(ア) GAJ の意志形五段化のある庄内以北には、新潟県のようなヨウは見当たらないが、そこにも五段化が生じている。カ変・サ変は、新潟およびそれ以北でもヨウはなく、しかし新潟以北に五段化形が散見される。

(イ) 近世後期の 2 資料ではヨウが講義資料にあったが、教養層ないし標準語的な可能性が高く、

その中に「一段型語幹+ロー」由来の意志形五段化が既に多くあった。そして、この成立要件は新潟地域でもあり得る。

(ウ) GAJ での新潟県のヨウの定着度はさして強くはない兆候がある。

ヨウは確かに、新潟の近世後期洒落本「後家集」に「モシお客そん(ママ)、御前そんかたにあげようとおもつて…」(290頁)と存在するものの、今日の大橋勝男・編(1998)『新潟県言語地図』の意志表現140図「起こしてこよう(意志)」のカ変例を参考にすると、オコシテクルなど動詞終止形も全県的にあり、「普段の言い方としては、意思(ママ)を表すためにわざわざ『よう』を付さなくても…それで意志の表現に成り得ると考えられる」とあり、意志動詞単独でも表現可能であるからである。なお、この点は変格活用「来る」の問題でなく、広くヨウの使用に関する点についても当てはまると思う。

また、近年まとめられた『新日本言語地図』(2016)126図「起きよう(とつぶやく)」でも新潟県にヨウは意外に少ない。

問題のラ行五段化の兆候を、先に庄内郷土本・新発田藩儒の講義録から推測したように近世中期頃と想定すると、近畿・江戸ではヨウが成立しているが、新潟地域でのその成立時期は不明であり、ここに伝播あるいは個別に発生するには、やや早すぎるように思う。-新潟地方でのヨウの発現は、新潟付近では開合の区別、また地域差もからみ、他に「起き+う」を例にすればオキューもあり得て(上の「後家集」は「ます+う」が「ましよう」表記)、かつ越後のオ段・ウ段拗長音のゆれはよく知られているが(迫野虔徳1998)、今日はウ段拗長音がユと合音化した地域もあって(加藤正信他1961)、地域差もからみ、推定は難しい。逆に言えば、それだけヨウの成立は遅れる可能性があり、これと上述の新発田藩儒の複数資料の「一段活用語幹+ロー」傾向の多さ、対してヨウの発現度の低さを考慮すると、「一段活用語幹+ロー」型がヨウを介してできたとは考えにくい。GAJの新潟県のヨウは、むしろ後からの発現ないし関東の影響と思う。

なお、五段化につき命令・意志形が広狭ありながら重なる点は、先行した命令形の五段化に刺激され、その分布内で意志・推量「う」をもつ地域にこれが波及した面が強いと思う。

5. まとめ—方言史の観点から

以下、上述の考察をまとめておく。

1. 新潟県以北の問題の活用型のラ行五段化は、優勢なラ行五段活用へ類推したものであるが、個別方言史的な誘因も関与したと考える(諸要因の列挙は略)。分布はこの地域差に潜む個別要因により地域・活用形とも違いが生じた。
2. そのラ行五段化は、意志・推量に「う」をもつ地域、命令形も含んで条件表現に～レバ形の領分が広い地域などの組み合わせでおこった、またその分布は圏論的な特徴のものとする。
3. この地方の五段化は、命令・意志形とも近世後期の庄内・新発田の資料群の状態から見て、近世中期頃には兆していたと推測する。意志形五段化～ローは、「ラ行五段型+う」の末尾形～ローにならない、直接的に一段型に波及したと考え、ヨウからの変化とは考えない。
4. 一段・変格活用の五段化はかなり地域固有の条件下に発現した局地的なものであり、これが広い地域で五段化に統合される趨勢にはないものと思う。この点は西日本を含めた全国視野

で改めて考えたい。

なお、東山・北陸地域も東日本に近いが、これらは西日本の影響も考えられ、続報予定の西日本地域の方言史的研究に譲る。「移行性分布」という面の検討もその機会としたい。

<資料>

地域・内容別に、成立時期、所収本などを示す。なお本文引用には、論証に支障のない範囲で、表記を変えた部分がある。

国立国語研究所編（1989～2006）『方言文法全国地図』大蔵省印刷局他

・庄内地方－「温泉の垢」（寛政10-1798）洒落本大成17巻、「箴の千言」（文化9-1812）同25、「苦界船乗合船」（慶応3-1867）-同29 ・新潟－「後家集」（文政2頃-1819）同29、

・新発田藩儒講義類－「豫齋先生語録」「訓門人割記」（共に、速水義行録、東北大狩野文庫）、「以東先生学談」（大倉精神文化研究所）

<引用・参考文献>

秋田県学務課（1929）『秋田方言』国立国会図書館デジタルコレクション

秋田県教育委員会（2000）『秋田のことば』

石川明子（1978）「江戸時代庄内方言の助詞と助動詞」『山形方言』1（山形県方言研究会）

大西拓一郎（1994）「鶴岡市大山方言の用言の活用」『鶴岡方言の記述的研究』国立国語研究所報告109-1

大西拓一郎（1995）「岩手県種市町平内方言の用言の活用」『研究報告集（国立国語研究所）』16

大西拓一郎・編（2016）『新日本方言地図』朝倉書店

大橋勝男・編著（1998）『新潟県言語地図』高志書院

岡田荘之輔・梅垣実（1962）「兵庫県方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂

加藤正信（1961）『方言学講座』2の「三-11 新潟」東京堂

金田弘（1983）「越後新発田藩儒井東信斎とその講述筆記-幕末期地方教養層の言語について-」『國學院大学紀要』21

国語調査委員会（1906）『口語法調査報告書』国書刊行会（1986版による）

小西いづみ（2011）「出雲方言における『一段動詞のラ行五段化』に関する覚書」『論叢 国語教育学』復刊2号

小林隆（1996, 2004）「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」『東北大学文学部研究年報』44, のち『方言学的日本語史の方法』第4章4節に改稿所収, ひつじ書房

小林好日（1944）『東北の方言』三省堂

齊藤義七郎（1965）「江戸期方言資料としての庄内地方郷土本」『近代語研究』1

迫野虔徳（1998）『文献方言史研究』清文堂

佐藤武義（1994）「江戸時代末期の越後新発田藩の方言」『国語学論究』4, 明治書院

橋本進吉（1959）『国文法体系論』岩波書店

彦坂佳宣（2001）「九州における活用型統合の模様とその経緯」『日本語科学』9

彦坂佳宣（2002）「地方語史の開拓と方言地理学」馬瀬良雄・監修『方言地理学の課題』明治書院

彦坂佳宣（2007）「仮定条件法の全国分布とその解釈」『安達隆一先生古稀記念論集』おうふう

藤原与一（2000）『日本語方言文法』武蔵野書院

船木礼子（2005）『日本語諸方言における意志・推量表現の変化に関する研究』阪大博士論文

北条忠雄（1982）「東北方言の概説」『講座方言学』4, 国書刊行会

松丸真大（2001）「ラ行五段化の語彙的拡張」『地域言語』13

柳田征司（2010）『日本語の歴史1－方言の東西対立－』武蔵野書院

<附記> GAJの整理には国立国語研究所「方言研究の部屋」のGAJ各種情報および作図プログラムの恩恵を受けた。地図加工の責は本稿の著者にある。藩儒関連資料は、東北大学・大倉精神文化研究所の各図書館から便宜を得た。

（本学名誉教授）